

ほうきやま 放亀山1号墳 発掘調査現地説明会資料

平成30年3月3日(土) 午後1時30分～

兵庫県赤穂市教育委員会

1 調査の経緯

今回の発掘調査は、古墳の保存を目的とした調査です。

調査を実施している放亀山1号墳は、これまで円墳(丸い形の古墳)とされ、あまり注目されていませんでした。しかし、平成26(2014)年度に実施した分布調査で、この古墳が前方後円墳である可能性が出てきました。もし、前方後円墳であれば赤穂市では初めてのものとなり、非常に貴重な古墳となります。そのため、発掘調査で古墳の形状や規模、またその残り具合を確認することとしました。

2 調査の概要

調査は古墳の形状・大きさ・残り具合を明らかにするために、古墳の土盛り(墳丘)上に6ヶ所の調査区(調査面積約75㎡)を設定して行いました。

調査の結果、大きく以下の2つの成果が得られました。

①古墳の形状は前方後円墳。

葺石の特徴や出土した土器から、古墳時代前期前半(約1,700年前)のものと判明。

後円部2段・前方部2段築成。

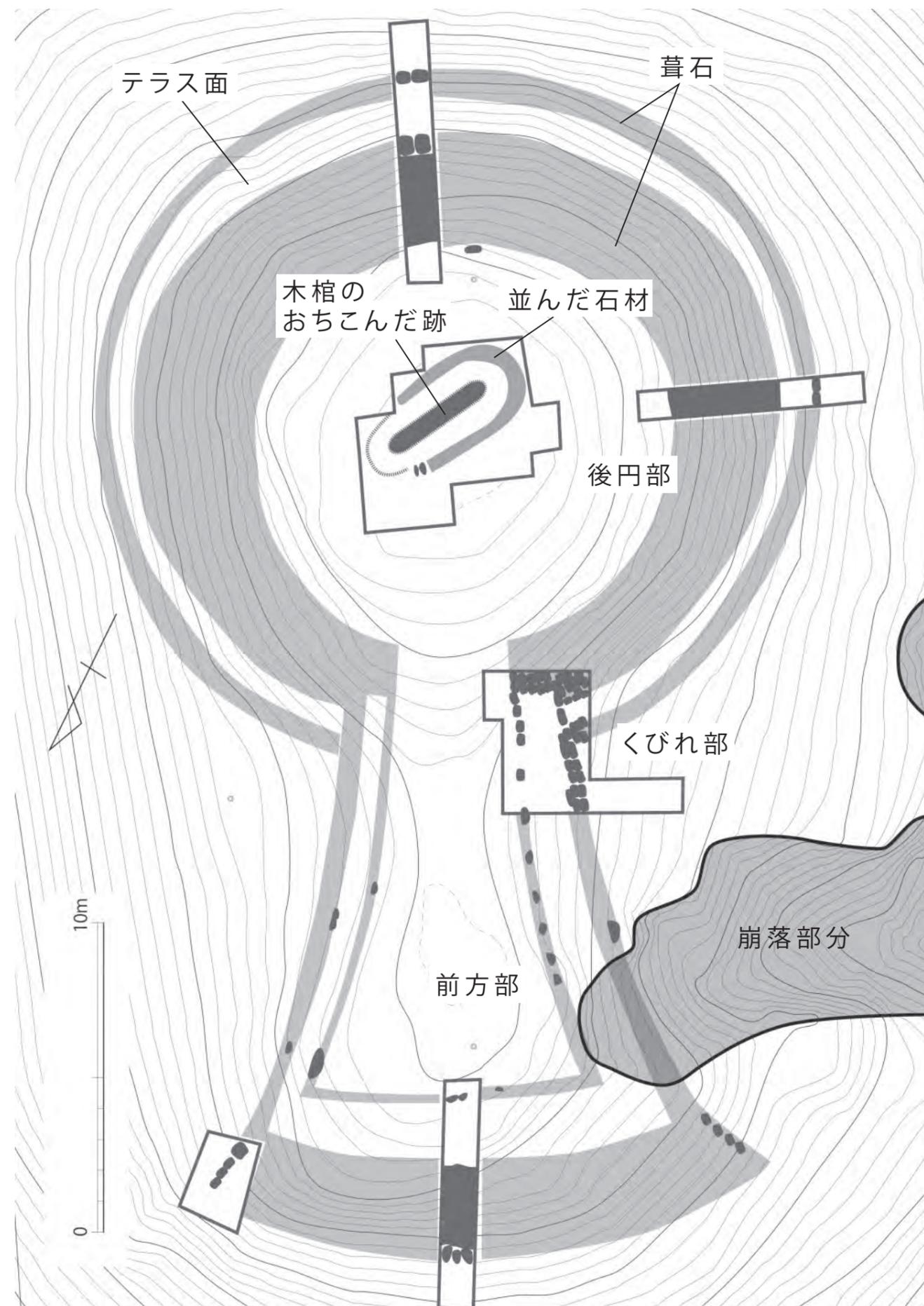
(全長38m・後円部直径23m、高さ約4.5m、前方部端からくびれ部までの長さ18m)

②後円部の頂上に、木の棺を埋めた墓があり、周囲に石材や土器が配置されている。

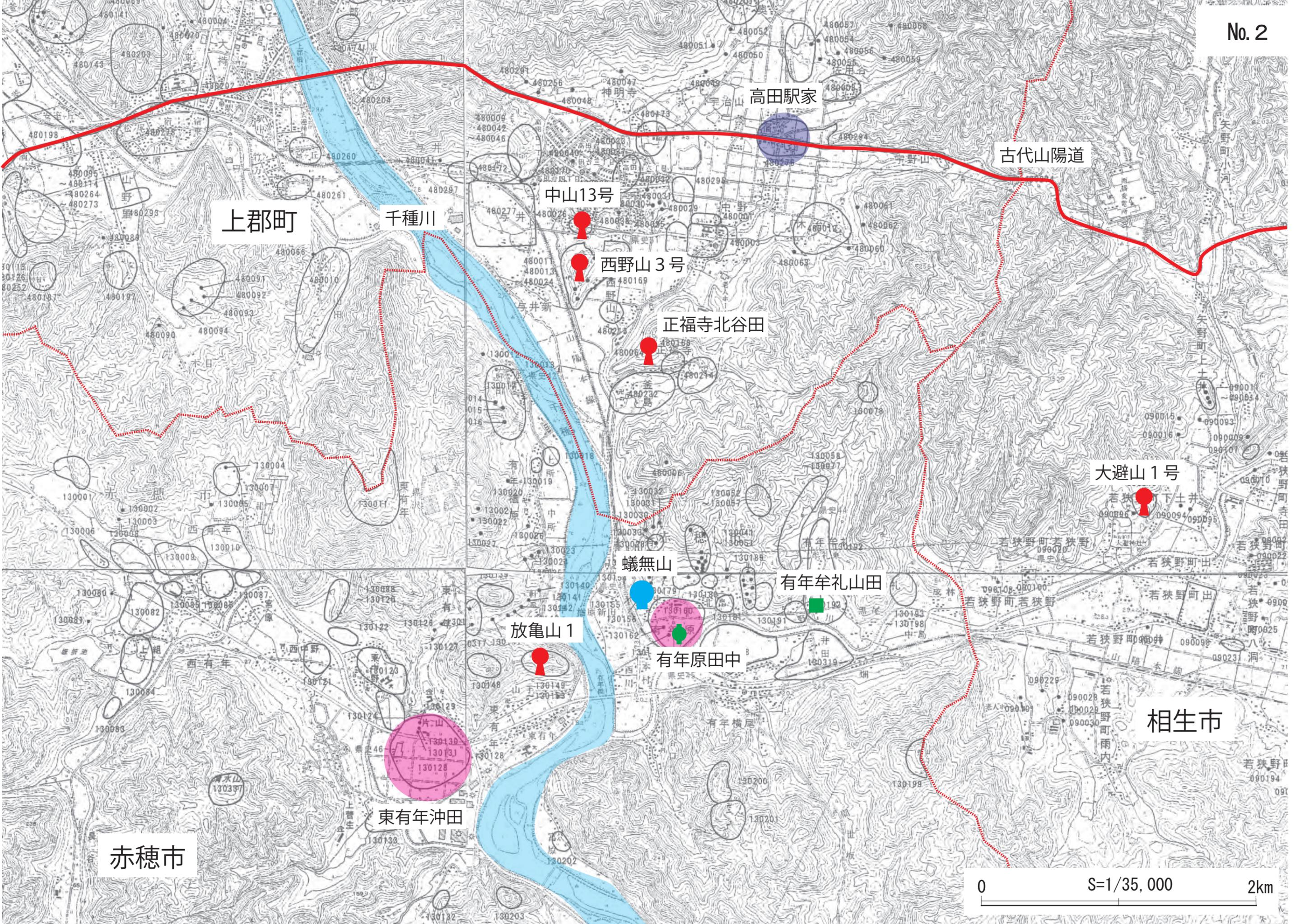
墳丘(ふんきゅう): 古墳本体の土盛りのこと。

葺石(ふきいし): 古墳の表面に積まれた石材。土砂が流れ、古墳が崩れるのを防ぐために積まれたとされています。表面の装飾の目的もあったと考えられています。

築成(ちくせい): 古墳は横からみると、墳丘が階段状になっています。この階段状になったようすをいいます。階段状の部分のうち、平坦な部分を「テラス面」といいます。



墳丘測量図と復元図



上郡町

千種川

高田駅家

古代山陽道

中山13号

西野山3号

正福寺北谷田

大避山1号

有年牟礼山田

有年原田中

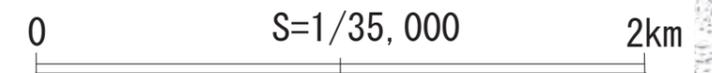
放亀山1

東有年沖田

蟻無山

相生市

赤穂市



3 調査成果の詳細

①前方後円墳の発見

今回の調査で、放亀山1号墳が赤穂市で唯一確認できる前方後円墳であることが判明しました。また、古墳時代前期(約1,700年前)の古墳も赤穂市内では2基しか存在しなかったため、3基目の前期古墳となり、非常に貴重な古墳であることが判明しました。

前方後円墳は古墳時代に築かれた有力者の墓である古墳のなかでも、最も格式の高いものとされています。そこに葬られた人物は当時の権力者や支配者などであったことが確実視されており、前方後円墳があるということはそこに権力者が存在したことを示しています。

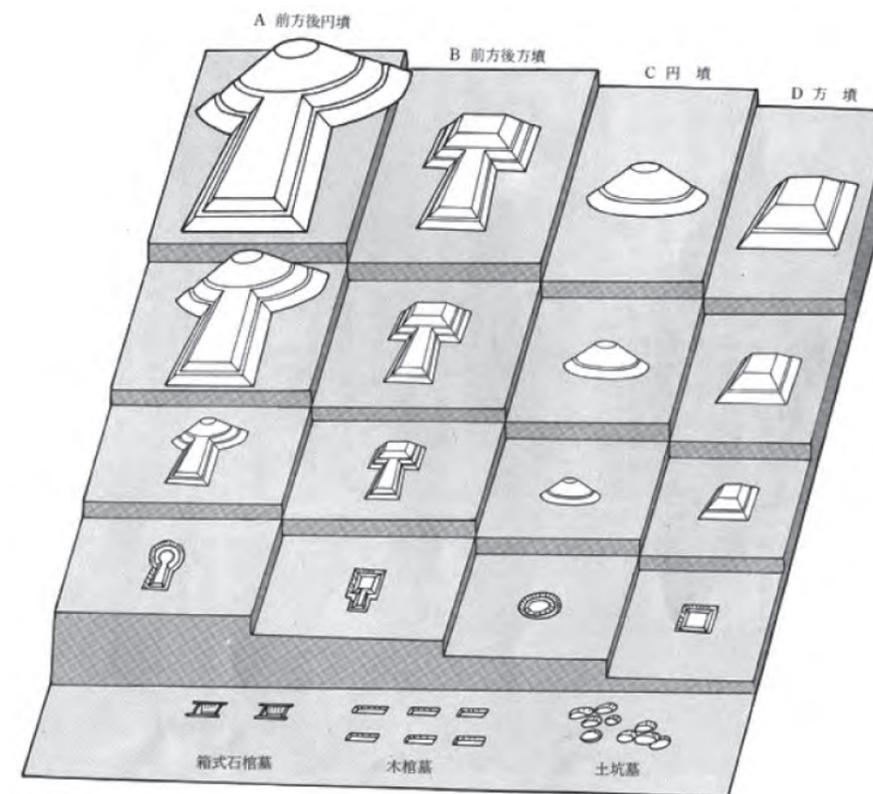
どのような人物が葬られていたかについては、今後周辺の古墳との比較など、研究を続けなければいけません。赤穂市有年地区に前方後円墳を築くことのできる権力者が、1,700年前に存在したことは確実です。これまでこうしたことは全く想定されていなかったため、新たな事実が判明したといえます。

②棺が埋葬されたときの、さまざまな痕跡が見つかった

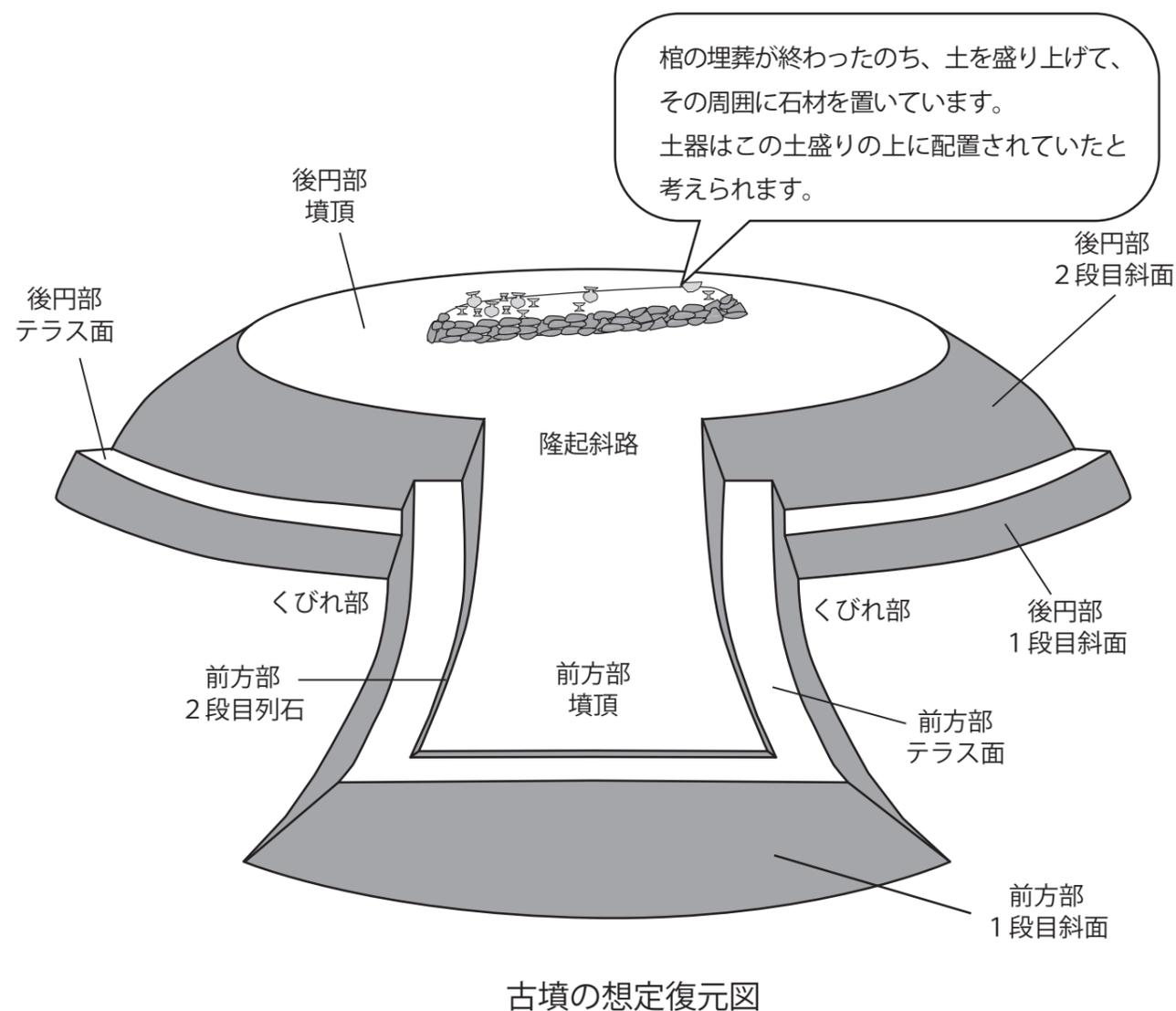
後円部頂上では、埋葬施設に関するさまざまな痕跡が見つかりました。

まず、表面の土のすぐ下に、30cm程の大きな石材がU字状に並んでいる状態で見つかりました。これは棺を埋葬した後、長楕円形に土を盛り上げて、その周囲に石材を並べたものと考えられます。また、この石材の隙間や周囲から土器が出土しており、土を盛り上げた上に土器が置かれていたようすが復元できます。前期古墳でこうした痕跡がそのまま残っているのは、兵庫県内では非常に珍しく、全国的にも貴重なもので、古墳時代研究の基準資料となります。また、前期古墳からまとまって土器が出土することも珍しく、土器についても基準資料となるでしょう。

また、こうした痕跡の下では、木の棺の蓋が腐り落ちて、陥没した土の痕跡が確認できました。このことから、棺は木製で、竪穴式石槨などの石で造られた空間は存在しないと判断されます。そのため、木の棺を直接埋める「木棺直葬」もしくは、木の棺を粘土で塗り固める「粘土槨」などの埋葬施設であったと考えられます。埋葬施設については保存するために棺の中まで調査することはせず、上層で調査を終了しています。



古墳の階層性 (都出比呂志 1998『古代国家の胎動』日本放送出版協会より)



③そのほかの成果

今回の調査ではこの古墳が前方後円墳であること、頂上部には埋葬施設に関連する痕跡のほか、墳丘には葺石も非常に良く残っていることも注目されます。

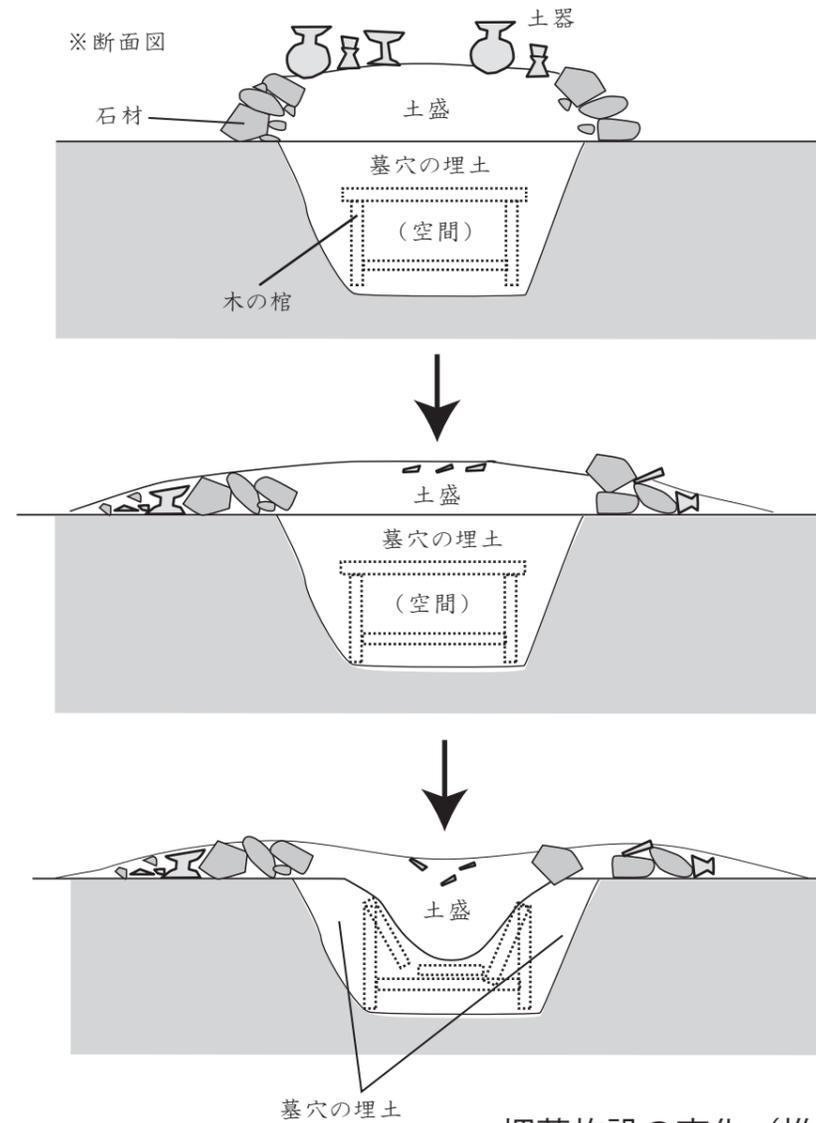
古墳は古墳時代前期(1,700年前)のものとは思えないほど、しっかりと石材が残されており、その積み方やその特徴がはっきりと観察できます。また、くびれ部では後円部と前方部の連結方法などが詳細に観察できます。通常、こうした葺石や古墳の斜面は長年の風雨や樹木、また後世の改変によって失われていることが多いのですが、この古墳に関しては、ほとんど荒らされることなく、非常に良好に残されています。古墳の築造方法などを研究するための良好な資料となることは間違いありません。

4 まとめ

今回の調査成果は、赤穂市で前方後円墳が見つかったという他にも、この古墳が極めて良好な状態で残されていること、また埋葬施設やその周辺が破壊を受けていないこと、そして土器がまとまって出土していることなど、非常に多くの成果を得ることができました。ここまで残りの良い前期古墳が調査される事例は、県内はもとより全国的にみても珍しく、今後の古墳時代研究の基準資料のひとつとなり得るものです。

また、赤穂市有年地区には、前方後円墳の祖形の1つともされる弥生時代後期の有年原・田中墳丘墓群や、県内最大級の方形周溝墓が見つかった弥生時代終末期の有年牟礼・山田遺跡、また古墳時代中期の大型帆立貝形古墳の蟻無山古墳など、弥生時代後期から古墳時代中期までの有力者の墳墓が多く築かれています。こうした遺跡との比較研究も、今後可能となってきます。

今回の調査成果により、有年地区には弥生時代後期から古墳時代中期まで、連綿と墳丘墓や古墳が築かれていることがより一層明らかになりました。こうした変化や変遷をひとつの地域内で観察することができるのは全国的にみても非常に珍しく、とても貴重なものです。今回の発見によって、赤穂市有年地区に点在する遺跡群の価値が、さらに高まったといえるでしょう。



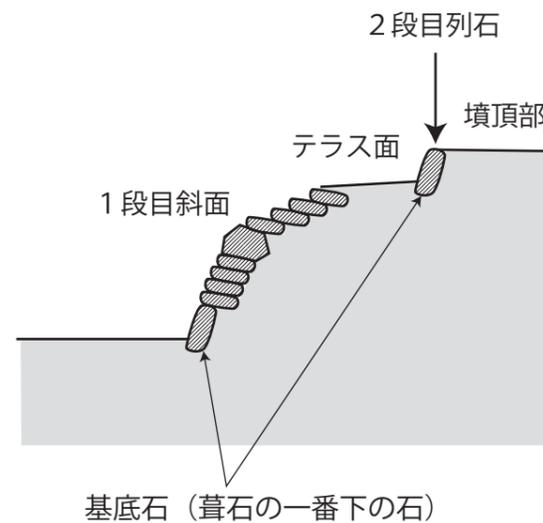
① 棺を埋葬して、その上に土盛をする。
土盛の周りには石材が置かれ、その上に土器が置かれる。
※ 棺の形状は推測です。

② 土盛が流出して石材と土器が散乱。
中央付近から土器がほとんど流れ出す。

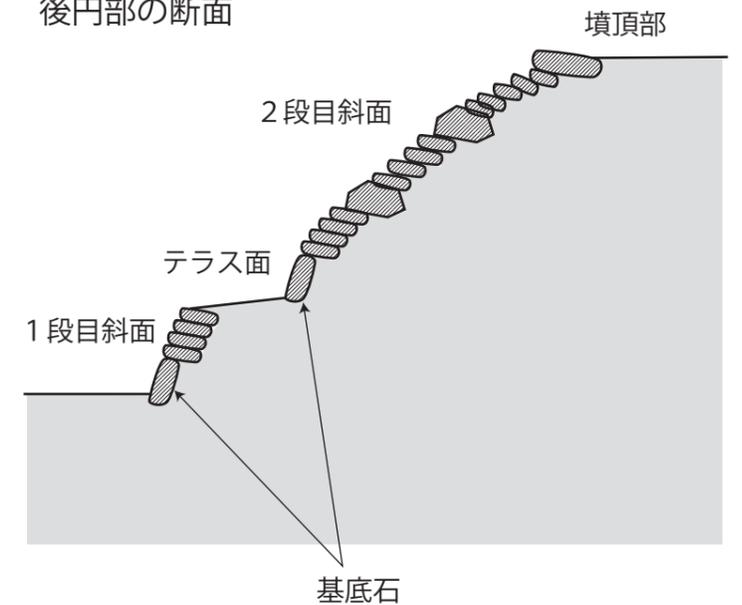
③ 棺の蓋が腐り落ちて、内部の空間に土砂が落ち込む。

埋葬施設の変化 (推定復元)

前方部の断面



後円部の断面



葺石の特徴 (模式図)